

甕棺累考三：一甕棺の源流再考

鏡山, 猛

<https://doi.org/10.15017/2335114>

出版情報：史淵. 62, pp. 1-26, 1954-09-15. 九州大学文学部
バージョン：
権利関係：



甕棺 累考 三

——甕棺の源流再考——

鏡 山 猛

一、序 言

昨年のはじめ、私は甕棺累考^(註)(二)を稿して遠賀川式の甕棺を類集し、我國の原始墳墓の一特色である甕葬の起源に關し若干の考察を提示しておいた。然しその後一年許りの間に新しい資料が増加して、前稿の私見に補考を加える必要が生じた。こうゆう短期間に資料の増加によつて考察が變轉して行く事は、將來又同様な材料に恵まれるならば又再考の補訂をも期し難い現狀である。時を俟つて一氣に問題解決を將來に期した方が適當とも考えられるが、つたない自分の歩みをしるした一里塚の意味で、時をまたずしてこゝに再び同じ問題を異つた點から考えてみたいと思う。

補考の第一は縄文式甕棺と彌生式甕棺との關係である。從來縄文式文化末期に甕棺葬が各地から報告されているが、近年九州地方の縄文末期甕棺の報告も出て來る様になつた。けれども遠賀川式甕棺が直接縄文甕棺に連結するような遺跡はなく、地域的には前稿に述べた様に「遠賀川式甕棺の發生は強い縄文甕棺の影響と傳統を受けつゝいた地域に於て起つたものではない」と云はざるを得なかつた。ところが昨年度から今年度にかけて私の實見した古式甕棺の數例はこの問題に關して批判的な態度をとらざるを得ない立場に置かれる様になつた。

近年彌生式文化の起源問題に關して縄文文化との關係が再検討され、土器に就いても前期彌生式土器と末期縄文的な土器の伴出遺跡の發見調査が行はれ、北九州に於ても福岡縣粕屋郡の立花、夜臼、福岡市板付の遺跡が調査され、一部は猶發

掘調査續行中である。これ等の遺跡に於ては彌生式土器の古い様式遠賀川式と縄文式末期の要素を持つ一様式の土器が混在している事實は考古學會や新聞紙上でも紹介された所である。私達がかつて後者の縄文的な土器様式を柏崎式と呼んでいた。これは戦前佐賀縣東松浦郡鏡村柏崎の出土と云はれる土器にこの様式のもの^(註三)が混じている事に氣が付いて提唱した名であつた。然し其の後柏崎の貝塚の發掘によつてこの様式の研究資料を得られないで^(註三)かえつて粕屋郡古賀町夜臼の遺跡で兩種の土器片が多量に出たので現在では夜臼式の名で呼ぶ事にした。^(註四)

これ等の一連の發掘調査は福岡縣や日本考古學協會の共同調査であるから公式の報告書が刊行されるまではなるべく論及をさけるのが妥當であるが、これ等の調査を續行している時に私の關心を持つた遠賀川式土器―丹塗磨研のつぼ―とセツトになつて縄文的な要素を多分に持ち從來の彌生式土器の概念にあてはまらない甕棺が出て來たのである。これ等の中には明らかに夜臼式の土器もあり、私はこの一連のものを夜臼とゆう名で呼び「遠賀川と夜臼のセツト甕棺」とゆうものと存在を認めたのである。こうなると一時期に於ける縄文、彌生の兩系統の土器が屍體埋葬の一セツトとして使用された事となり兩系土器の結び目から二つの文化現象が一部解けさうな氣がして來た。

その最初のきつかけを作つたのは佐賀縣東松浦郡鏡村の葉山尻に於ける昭和二十八年度の第二回目の支石墓調査であつた。以下相ついで^(註五)の發見は別項に述べる通りである。

補考の第二は甕棺内の屍體の姿勢である。從來の見解によれば石器時代と云はれる縄文文化期の埋葬屍體は屈葬を原則とし手足を折り曲げて土中に埋められるに對し、甕棺は大な二つの合せ口甕を使用しているので成人も手足を伸して―即ち伸葬或は伸展葬―甕に容れられたものと云う論考で、こゝに縄文、彌生二つの葬位に對する對蹠的な現象がみられるとゆうのである。この對立關係に就いては甕棺が果して伸展葬を原則とするかはかねて多少の疑問を懷いていたのであるが昨年度に筑後平野の二ヶ所で大きな甕棺の中から屈葬の人骨をほゞ原態のまゝ調査する事が出來たので從來の報告又は

乏しい見聞を集めてみると果して屈葬例が極めて多い事が判り一應昭和二十八年秋季の日本考古學協會十二回總會席上で研究發表を行つた。^(註五)今その二三について多少の補訂を加えてこの機會に稿を新にする事とした。勿論甕棺の葬位が屈葬である事が縄文文化期の埋葬法の傳統的色彩として強調されすぎて積極的に兩者の關係を密着させる論據にする事は穩當でないかも知れない。しかし彌生式甕棺葬が仲展葬であるという立場に立つて縄文甕棺との關係を絶縁しようとする論に對しては確實な資料の反省がなされなければならない事は云うまでもない。

縄文式甕棺と彌生式甕棺の系統發生論に對しては猶以上の二つの問題によつて凡てが解決されるものではない。しかし吾々のつたない考説が、日本の古い二つの文化期に埋葬とゆう文化現象を對蹠的に考え勝な所に一つの連結機の役割りを果すならば文化轉換期に於ける傳統の光を見失うことはなからう。

(註1) 甕棺果考(一)——遠賀川式甕棺とその源流——史淵第五十五

五輯 昭和二十八年二月刊

(2) 昭和二十八年春秋の考古學協會彌生式分科會の席上で杉

原莊介氏や森貞次郎氏等より遺跡の概報や意見の開陳が

あつた

(3) 昭和二十六年八月の調査でその結果は佐賀縣文化財調査

報告書第一輯に私が「柏崎貝塚調査概報」として報告

(4) 昭和二十六年八月調査日本考古學協會と福岡縣教育廳と

の共同調査調査主任は森貞次郎氏

(5) 昭和二十八年十月三十一日本考古學協會總會での研究發

表要旨はプリント「甕棺内の葬位について」参照

二、古式甕棺の實例

佐賀縣東松浦郡玉島村五反田

唐津の灣に注ぐ玉島川の清流が山峽を縫つて平野の奥詰めに出て來る所に新に五反田の支石墓遺跡が發見された。昭和二十九年四月同地の大場幾代氏宅では主屋の側に溝を掘つていた際大石が並んで出て來た。近在の唐津高等學校の學生諸

君が見つけて支石墓ではなからうかと縣へ報告された。筆者も縣から依頼を受け五月八日と五月十五日の二回許り現場に行つてその現狀を調査し四個の支石墓を確認した。その結果は近刊の佐賀縣文化財報告書第四輯（昭和二十九年出版豫定）に改めて報告する豫定であるからこゝでは問題の土器についてやゝ詳しく述べるに止め他は梗概のみを記する事とする。

玉島川に臨む北方山塊は城山を主峰として東西に走つてゐるがその山麓に五反田の部落がある。大場氏の宅はことに山裾に近い所で傾斜地の畑につゞいて裏側（北）が石垣になつてゐる。主屋の東側には道路があつて道端より壁までの間隔は二米餘りにすぎない。この狭い土地に排水の溝を掘られたが道路の下に一部を埋没したまゝ三個の支石墓がほぼ一列に出て來た。排水溝は梅雨前完成を期して工事を急いだため、私が調査に行つた時は佐賀縣の係の人々や唐津高校考古學部の人々によつて或程度の掘開が行はれてゐたが道路下に埋没してゐる支石墓の部分は道をつけかえない限り調査する事は出来なかつた。所が幸に家の壁の方にはかゝらずほと一列に南北の方向に並んで、約五米間隔で三個東に折れて主屋の裏側に一個都合四個の支石墓が確認されてゐた。南から北に番號はつけられてゐた。私達の二回目の調査によつて二號、三號の間に土壙が新に出て來た。この壙は一米弱の深い壙であつたが平面形も他の支石墓に共通の圓形に近い平面を持つてゐる。上石が運ばれてゐたものか支石の残りらしいものもあつた。又更に一號の南に上石らしい丸味をおびた石を掘り出したがこの地下構造は確かめる餘裕がなかつたから果して支石墓かどうかは斷言出来ない。一號から四號までの支石墓は何れも上石と支石を持ち現在の狀態では又凡てその半ば近くが道路の下に埋められてゐる。たゞ土壙の調査は上石の下面を横から掘りすめてゐるからその全形の判明するものもある。こゝうゆう調査には上石をはぐつて土壙を調べる方法がとらるべきであるが道路の下に埋没してゐる現狀では横掘りも止むを得ない措置であつた。横掘りの方法によれば土壙の壁の一部は當然壞されねばならない。勿論最初氣付いた時に既に壙の一部は溝路のために掘り去られた所もあつた。一號支

石墓土壙からは目ぼしい出土品を見ないが二號、三號、四號からは彌生式土器を出し而もその土器樣式に注目すべきものがみられる。第二號の壙内か或は壙外とも云う地點不明の出土品に丸底埴一個があり地主の家で掘り出されたものである。土師又は彌生末期に共通な形態を持つものであるが肝心の出土地點が不明であるから説明を除外しておこう。第三號の壙内から遠賀川式の有文土器一個が採集されている。土壙のあつた位置は上石の直下支石の横であるから壙は初めから埋められていたものと思はれる。この遠賀川式の土器は廣口のつぼ形で横に擴がつた特徴のある器形である。口頸部に二條の斜行沈刻線が三對たすき狀に描かれ肩部には二條の横帶細線の下に複線の山形文を連續している。このつぼは上石の直下であり、土壙を埋めた時に副葬された器物と思はれる。この第三號の完形土器の發見によつて吾々は次の様な支石墓の構作過程をも知る事が出來た。

(1) 土壙は屍體を埋葬した後に再び土を以て埋めた事

(2) 支石墓に於ける支石は上石を乗せた後に据りよくする爲、周よりつめた石と解されるけれども、この支石は餘りにも中央によりすぎているので支えの石として大した役割を果さない。支石を先に置いて土を被せて後上石をのせた事

これにもまして吾々の注意を惹いたのは、從來支石墓の下部構造に於て時代の判斷出来る甕棺の樣式は何れも須玖期のものであつたが、こゝに始めて遠賀川式土器が上石の直下から出て支石墓の年代推定に新しい資料を加へ得た悦びであつた。而し吾々は第四號の支石墓調査に於て更に興味ある土器の組合せに相遭したのである。

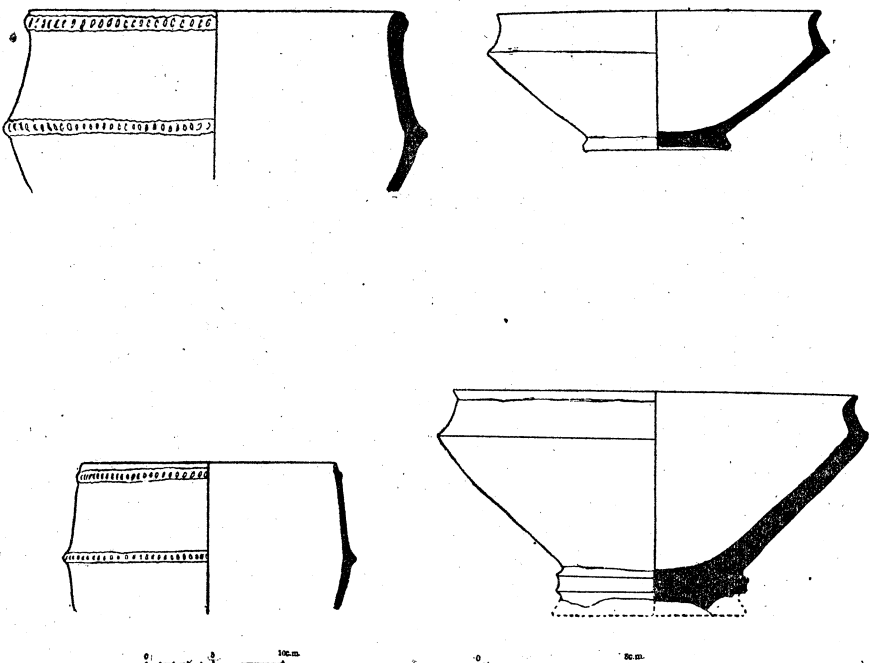
第四號支石墓は南北に列ぶ一號乃至三號とやゝ離れ家の裏手にあり、石垣の下に一部上石の表面をみせているものである。これも上から掘れば、石垣が壊れ崖くずれがするので、横側面から土壙を掘り進んでいた。私の第一回の調査の折は壙の入口に柵をして奥の方に問題の合口甕棺がみえていた。これは器形が普通の甕棺と異つたものであるから取り出さず、にそのまゝ置いて私の調査を待つていたので、幸に原狀を確かめる事を得た。然しその内私の現地の調査が遅れた爲附近

の少年達が甕棺の残片を引出した。その後これ等の持ち去られた破片の一部は返却されたけれども甕棺を復原してみると上下甕共に口邊部が若干不足する様である。但し器形の大要を知るにはさしつかえない。この合口甕は壙の奥詰めに發見されたもので一部(上甕の下底部)は上石の下になつてゐるけれども下甕の大部分は上石の下からはみ出してゐた。従つてこの第四號の土壙内に埋葬された主格者は土壙の中央部を占めその側に陪葬の形で葬られたのがこの甕棺であつたと考えられる。たゞこの甕棺は口の狭い遠賀川式のつぼを下にしてコップ形の所謂夜白式の鉢を上蓋にしているので火葬骨洗骨でない限り初生兒しか容れる餘地がないのである。小形甕棺である點は幾つかこゝに並べあげる古式甕棺に共通する特徴なのである。吾々はこの小甕棺が上石下の土壙に埋められてゐる事實を考慮に入れば、主人の埋葬に無關係に存在するものでない事に想い至るであらう。支石墓築造以前のものでない事は確かである。又壙内に後で入れたと假定してもそれ等の甕棺が今の所彌生古式の甕棺であつてみれば土壙の年代を更に遡らしめなければならぬ結果となるであらう。甕棺と支石墓の年代差を考えに入れる程長い時期を経過してゐるものではあるまい。即ち支石墓の年代を大略この甕棺が語つてくれるものと解する。

こう考えれば從來私共の考えていた北九州の支石墓の現れはじめる年代が俄かに古くなり、須玖式ばかりと思つてゐたのは、大いに考え直さねばならない結果となつて來た。丁度この頃私は同時に長崎縣島原半島の諏訪池の邊りにある原山の支石墓群を調査と云つても實は見學を思い立つて、五反田第一回調査に引續いて島原に向つた。

同地——南高來郡北有馬村原山——では二日間に亘つて、かねてから調査にあたつておられる北串山中學校の馬場強先生に案内され、遺跡の現場を實測し中學校で遺物を拜見したのであるが、この遺物中支石墓直下の土壙内の土器がやはり遠賀川式と夜白式である事に驚かされた。これ等の出土品は既に五年許り前から開拓團の手によつてこわされる支石墓から採集されたものの由であるが、その間に出来るだけ資料をとり觀察を續けられた氏の熱意によつてこゝに報告する事が

第一圖



0 100 m. 0 50 m.

肥前島原原山支石墓遺跡出土土器

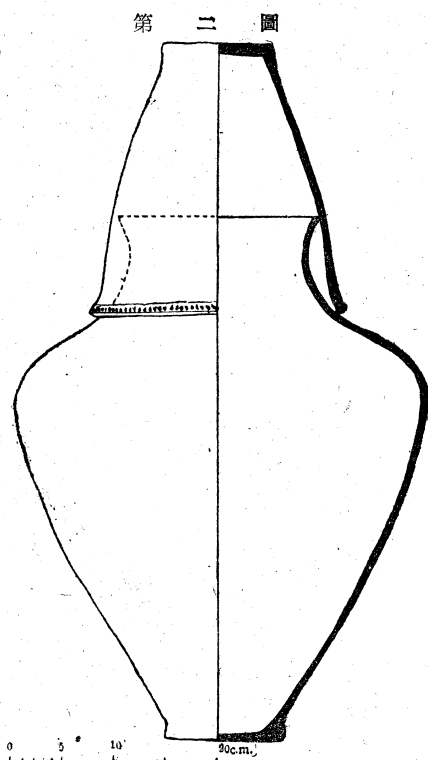
出来るのであつた。

昨年の夏には七田忠志氏の調査もあつて北九州の吾々仲間には多少知られていた遺跡であつた。支石墓の下部構造として土壙と箱式棺があり土壙は圓形或は小判形の一般の壙の形と變らないが、石棺は蓋石までそなえたもので支石墓關係の石棺が多く略式の物であるのに對しこれは長方形の板石圍みで正式の箱式棺である。たゞその形が餘り大きくないけれども深さが充分あるから成人でも屈葬すれば屍體を容れるに充分である。これ等石棺と土壙との年代的關係を明かにする必要があるが正式の發掘調査の結果でないから確言出来ないけれども、石棺内に充満流入した土砂の中に夜白式土器らしきものがあり土壙と混在分布しているから大した年代差も認められないのではなからうか。この石棺を持つ支石墓は尙數個原狀のまゝ残つてゐる様だから將來正式調査の期まで破壊されぬ様保存しておきたいものである。

扱北串中學校に所藏されている支石墓關係の土器

を調査してみると先づ夜臼式の土器は土壙内発見と云はれるが第一例は上石の下、支石の一邊に近く存在していたとゆうから副葬土器と思はれる。口縁部の外反する浅鉢の形で焼成火熱は低い事が覗える。底はわずかに上げ底となつてゐる。これに似た鉢形土器が今一つある。底部外圍に突帯をめぐらしているのが珍らしい。他には口縁部と胴部の破片が數片ありこれには刻目がみられる。この兩種の土器は同一壙内より発見された明證はないが、五反田の支石墓其の他のセットからみて同一時期に近い時期のもつと解する事が出来るであらう。

以上支石墓遺跡の新例を概報して問題の五反田甕棺の觀察を述べる事が遅れた。現在佐賀縣教育廳社會教育課で複原作業を漸く終つた甕棺セットは上蓋に夜臼式の深鉢を用い下に遠賀川式のつぼを用いたものである。先づ遠賀川式のつぼは口徑一九糎、高さ五〇糎底徑一二糎、肩部の直徑四〇糎程度のものである。肩のはりがやゝ上部になつてゐるので瓶形とゆう方が適當であるかも知れない。この點葉山尻のそれと同じく特徴的な感じを受ける。こつゆう形が唐津地方の地方色



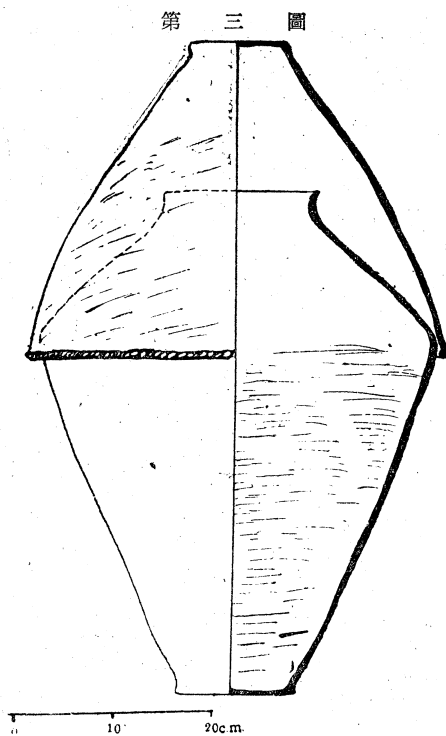
肥前五反田支石墓甕棺

として了解されるか、或は遠賀川式タイプのうちに更に新しい資料が追加されて時代的な形態特性と解すべきかは將來に残された問題である。これは上の蓋鉢とは焼成胎土が異つてゐる事は何れの場合にあつても不均合な異様式の組合せに奇異な感を懷かされる。この下かめはよく焼きしまり、火力の關係からか部分的には赤色を呈している。表面を磨いてある所では殊に赤い顔料でも塗つたか様の

感を持たされる。表面全体のへら磨きの痕がことに頸部に於ては縦の方向に明かに見受けられる。つぼの口縁は打ち欠かれているが口唇部にはりつけた粘土帶とでも云うべきものがとれている程度にすぎない。こうゆう技巧のいる打ち欠きをやつて上鉢を隙間なく深く被せる積りであつたであらう。蓋となつた夜臼式の深鉢は口縁がやゝ外反に開いた底の廣い安定した形である。焼成度はさして高くないが表面は黒褐色を呈し胎土は精細の方であらう。口徑三〇糎、高さ二六・四糎、底一〇・八糎である。器面の調成がなされて、磨研の痕をみるけれども口縁部に近く條痕が横に残つた所があるので磨く前に貝殻の類で器面を整えたものであらう。口唇は外側にゆるやかに反つて、外縁に粘土帶をはりつけ繩狀の刻目をつけている。この部分が凸帶でなく、刻目の列點があれば吾々はこれを遠賀川式の鉢と呼んでも差支ない程近似している。この口唇部の刻目を持つ凸帶を以て、一應遠賀川式の範ちゆうから除いてみた。けれども後述の葉山尻の夜臼式のものに比ぶれば、條痕が消されて表面が滑澤をおび口唇の刻目も斜でなく、垂直に押している點など彌生式土器に近づいている事が自ら明かであらう。この二つの埴と鉢は合して一セットをなしていたが下がめの口邊一ぱいに鉢が被さつていた。傾斜約四〇度で、他の例からすれば挿入式の甕棺の姿をとるものであるが前にも述べた様に屍體をそのまゝ容れるとすれば、初生兒しか容れられぬ。勿論この合口甕が屍體を収めた容器であるか否かは猶檢討を要するけれどもさし合せの小形甕が甕棺の通常形式をとつている事だけは承認されるであらう。

吾々がこの五反田の新しいセットの甕棺を見て、今迄の調査で考えなほしてみなければならぬものに佐賀縣東松浦郡鏡村葉山尻の支石墓遺跡がある。この遺跡は五反田から西南方約七杆の位置にあり距離が近いだけでなく、同じ支石墓群で相似た形相を示しているので興味のある遺跡である。^(註一)この支石墓群と甕棺群集地域の調査は、昭和二十七年と二十八年の二回、佐賀縣松尾禎作氏等の盡力によつて遂行され、その調査結果も縣教育廳から公刊される日も近いが、昨年夏第二回の調査で第三號支石墓に近い位置から二ヶ所に小形合口甕棺があらわれ、その部分の調査に當つた私は共に夜臼、遠賀

川の組合せがある事に興味を持った。吾々の調査番號に従えばこの二つの甕棺は二十五號と二十六號である。二十五號は三號支石墓の支石に接して存在していたために開墾による發見當時支石墓の構造を確かめる際に、その上面を削り取られた疑がある。二十六號は幸に原位置に發見されたが、燒質がもういのと、木の根が器壁を取りまいて器體は細かく破碎している。これ等の甕棺は佐賀大學に運んで接合復原中であるが問題の二十五、六號は完全に接合する事は困難である。今發見狀態の實測圖によつて大きさを示せば



肥前 葉山尻 合口 甕棺(第26號)想定圖

上かめ——夜白式鉢形土器

口徑四〇糎、高さ二〇糎、

下かめ——遠賀川式つぼ形土器

肩部徑三八糎、高さ約五〇糎、底一二糎、

二つの土器は挿入しているので、合せて約六七糎、埋葬傾斜角は約三〇度である。扱この被せ蓋をなしている鉢形土器は、口縁に紐線狀隆起帶を作り、横走の條痕が全面にみられる。器形は上に擴がつて側線は變化に乏しい土器である。燒質はもろく弱い、黄褐色を呈している。

つぼは肩のはつた形で表面は丹塗りで器肌は軟弱である。遠賀川式のつぼとしては肩が上の方にあがつた特徴のあるものである。底面に葉文へら書きがあり、内面肩部以下に條痕のあるのが特徴的である。

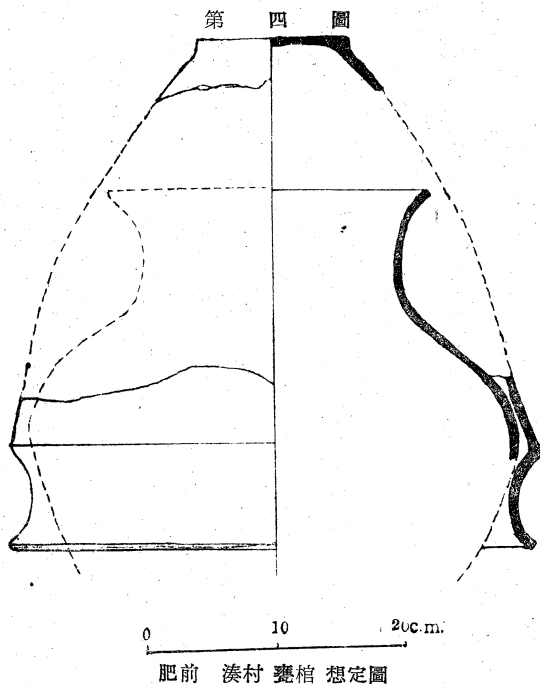
第二十五號の合口甕は、二十六號と反對に、下甕に夜白式の鉢形土器を、そして上がめに遠賀川式土器を使用したもの

であつた。上かめの口邊部は僅かに口邊殘片がある程度で丹塗り磨研の状態は二十六號の下甕に似ている。下の鉢形土器も現に口縁部を失つてゐるけれども胎土、燒質、條痕等大ききまで二十六號の上蓋によく似てゐる。この二十五號かめは三號支石墓の支石に接して存在してゐたので、かめは支石の方向からつぶされた様な格好で出て來た。そこで吾々はこの甕棺は支石墓を造る以前にあつて、新に三號支石墓が作られた後に上石や支石の重みの爲に土壓をうけつぶれたものと考へてゐた。それは從來の支石墓が須玖期の甕棺と伴い、古式彌生式土器とは關係ないものとゆう先入觀が、知らず／＼の間に私の頭を支配してゐた爲と思う。然しひるがえつて考えるに若しこの甕棺が支石墓より前にあつたとすれば、支石を置く時に邪魔になる様な位置にある。従つて支石墓を構築した以後か、或は同時に埋葬したと考える事も可能である。この支石墓は、この地域の他の三つの支石墓より最も高い位置にある。今私は第三號支石墓の時代をこの二十五、六號の甕棺によつて決定的な解決を興えようとするものではない。たゞ玉島村や諏訪池畔の例から云つて支石墓がこうゆう夜臼、遠賀川のセツトをなす時期にもあり得た事を承認出来ればよい。

先に述べた昭和二十八年年度(第二次)葉山尻の調査で、支石墓下の土壙の存在が新しい資料として吾々の注意に上つた。從來彌生式時代の石蓋土壙と呼ばれる一連の墳墓構造と支石墓が組合されて、我國獨自の構成を示している事がはじめて知られた。爾來支石墓下の土壙は熊本縣玉名郡大野村年ノ神に、又玉島村五反田と相ついで發見、更に長崎縣島原半島の原山も早くから出現してゐたのであるが、それが反つて吾々の調査には遅れて注意に上つた。これと共に、矢張り昨年度の葉山尻調査で初めての發見だと思つてゐた夜臼、遠賀川兩式の甕棺セツトも、同年の四月初旬に佐賀大學文理學部の學生松岡史君等の手によつて、佐賀縣東松浦郡湊村字鼓で調査されている事を知つた。同君の提示に従つて、以下その概略を紹介しておこう。

發見場所は唐津灣頭海岸に近く附近には古墳等もあると云う。この合せ口土器は、下甕が遠賀川式上がめが夜臼の形式

となつてゐる。これも土採り作業中の発見であるから現に下かめの底部は取り去られた後で明かでない。下かめは口縁部と肩部と残片が採集され上がめも亦口縁と底部があつて全形が明かでないうらみがある。傾斜約六〇度許りでやはり小形



成火熱は高くなく下かめとなつたつぽと對蹠的な形態と特徴を持つ徑約四〇糎高さ約四〇糎（推定）底徑一二糎である。この土器口縁上面には浅い一條の刻線がめぐつてゐる事を注意しなければならない。縄文末期の口唇に屢々見受けられる手法である。

註(1)昭和二十七年年度の調査は松尾禎作氏より發表があり日本考

古學協會總會席上の發表の外左記の論文がある

松尾禎作氏「葉山尻支石墓調査概報」

考古學雜誌 第三十九卷 第一號所載

甕棺である。下がめは丹塗磨研の痕を残している良質の土器である。總合復原圖によればこの形式は明かに遠賀川式土器である。口徑約二四糎、但し胴部以下は崖面にあつて、既に取り去られていたので、つぽの下半分は残つていなかった。頸部から肩部にかけてのはり出しが強いから、五反田、葉山尻の如き形態であるかも知れない。上がめは鉢形土器で肩部はく字形はり出しとなり、口邊部は外側に反りを持つ形態を示している。この點は彌生式土器にはみられない特徴である。胎土には粗砂粒を多量に含んでいるが、表面には薄い膜狀の粘土が置かれたものか磨研を加えた形迹がある。しかし少し強く洗えばこの粘土の膜は破れて砂混入の胎土が露はれる。焼

三、彌生式甕棺と縄文土器

前項の要旨は佐賀縣の玉島川畔の五反田遺跡にはじまつて、鏡村葉山尻、湊村鼓と、遺跡にして三ヶ所、個體數にして四つの甕棺が遠賀川式つぼと夜臼式鉢の組合せになつて一セットをなしていた事を云うにあつた。今改めてこの組合せを通觀して検討してみよう。第一に遺跡は三つとも東松浦郡の唐津灣に望む小平野の奥か、海岸に近い所である。唐津平野は縄文文化期以降の古代遺跡の豊富な地域で發見遺物も興味あり問題を含むものが數多い。これ等の甕棺等もその一つの例であらう。

最初に吾々は夜臼式と呼ばれる鉢形土器からながめて行こう。合せ甕に用いられたものは五反田の深鉢形で葉山尻と鼓の方は比較的淺い。第一類の鼓のは肩の屈折が特徴的である。第二類葉山尻と五反田の鉢形土器はその器形のアウトラインを示してみれば遠賀川式の鉢形土器に近似している事は誰しも考えるであらう。然し細部になると、彌生式土器にはみられない特徴を含んでいる。先づ第一に口邊外周の紐狀突帶である。第二に器面調整の條痕である。これ等の特徴は後期縄文土器の製作技術の傳統をつぐものとして理解されるものである。次に鼓遺跡の例の如く口緣部が外反りで、下腹部が僅かに内彎する器形、即ち肩部からく字形に屈折する器形も亦縄文土器の特徴と云えるであらう。殊に後期土器にはこの式のものに相當にあり御領式と云はれる九州の末期縄文土器にも類似したタイプを求める事が出来る。猶この器形のものが朝鮮では南方絶影島の貝塚から採集されている。^(註一)これは對馬海峽を挟んで南からの波及か北からの影響か問題を含んでいる。更に又鼓の例は口唇部に一條の沈線をめぐらしている。この特徴は御領式土器にしばしばみられる特徴である。燒成度も又低いと思はれもろい感じがする。色調は黃褐色で冴えない如何にも沈滞した肌目を感じさせるものがある。葉山尻の例は最も脆弱な感じがする。勿論燒きしめが比較的よいものもないわけではない。器面の一部に滑澤を帯びるものは

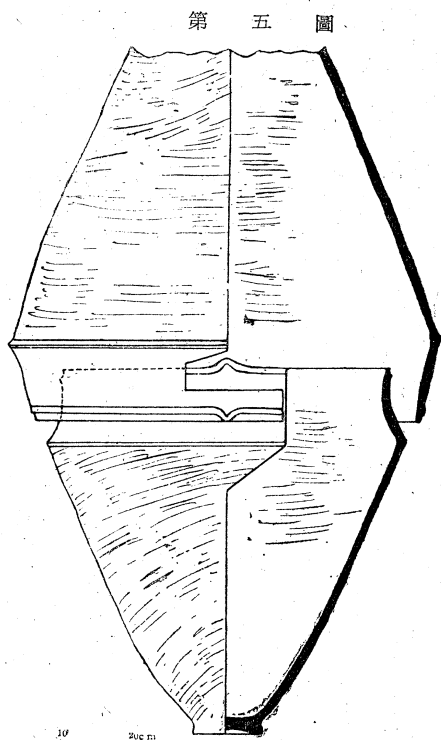
へら磨きの痕と思はれる。この手法も御領式土器にみえる。

こうした特徴を数えてくると、夜臼の鉢は縄文末期の御領と彌生式前期の遠賀川式土器の中間に位置する事となるであらう。吾々はこよう器形の類のうち條痕を持ち、肩部の屈折した例に左の如きものをあげる事が出来る。(第三類とする)

筑前 遠賀郡遠賀村下底井野 (八幡高等学校所藏)

北九州古文化圖鑑上冊圖錄參照

日向 宮崎市赤江舊飛行場敷地 (宮崎縣立博物館出陳)



豐後菅生彌宜野繩文式甕棺 (據佐藤曉氏)

薩摩 鹿兒島縣日置郡永吉村黒川洞窟

(河口貞徳氏所藏)

これ等の甕と器形の類似したものに大分縣菅生彌宜野の甕棺がある。(第四類とする)この土器に關しては既に史淵第五十五輯の舊稿に紹介しておいたが佐藤曉君の好意によつて實測圖を受領したから、序を以てかゝげておこう。

これには横走の條痕があり、口縁部に低い山形突帯もみられる。口縁部にめぐらされる凸帯が一ヶ所で切れ上つている所等と共に縄文土器の特徴をより多く具えていると云えよう。

こうして縄文末期の第四、第三類より、第二類に至る變化の跡をたどり、更に第一類——遠賀川式鉢形土器につながる一連の連續する形式變遷が飛躍なしに辿られる様である。吾々が夜臼の名を與えている第一類に於ては、甕棺に限つてみれば肩部の屈曲が失はれる時期に到達している。然し條痕と紐狀突帯が残る。

以上で夜臼式の鉢形土器の時代的な位置をみて來たが、次にこれと對をなす遠賀川のつぼをみなければならない。この土器は上かめとなる一例があるが、他は下かめとなつて屍體容器の主要部を占める様な位置にある。焼成は良好、胎土も精擇された良質の土器である。又表面を研磨し、赤色顔料を塗り、一例は赤燒きの肌をへら磨きして同様の効果をみせている。かうゆう精良土器と、粗製土器が一つのセットになるとゆうことは不均合な感じを持たせるが、これは特に二つの異質的な土器を屍體埋葬用に別々に製作したとは考えられない。日常容器の轉用と考えられる。問題は墳墓埋葬容器としてではなく、日常生活に於ける土器様式の混在とゆう所から解決されねばならぬであらう。概念的に考えれば、炊さん或は常時使はれる粗製土器と共に、貴重品を容れる精製土器が同時に存在すると云う事は何等不思議ではないかも知れない。然し兩者の關係は單なる用途の差異の他に發生系統を異にする點も考慮に入れなければならない。これ等の問題は近時の北九州の夜臼式遠賀川式土器を併せ出土する住居址のみならず、全國的な縄、彌の接觸様式の解明に伴つて明かになる事と思うので、深くは觸れない事とする。今一つの丹塗土器その形も肩の張つた長手の瓶形のものに類したものが、特に唐津地方で擇ばれて身となり、その蓋には粗製の縄文的要素を多分に持つ鉢形土器が用いられている事は、二つの土器の縄文彌生の兩系の接觸結合の實狀をうかう好資料といえよう。吾々は所謂縄文土器の甕棺として紹介されたものの中に、條痕の著しい物が多く、時期的にも先に述べた第二類乃至第四類の類が大多數を占めている事をこゝに想起すべきである。そうすれば、今まで彌生式土器とはるかに離して考えていた縄文甕棺も、その出現は案外新しい時期に接觸するかも知れない。但しこれは縄文文化圈に於て考慮解決すべき問題を含んでいる。

註(1) 横山將三郎氏 釜山府絶影島東三洞貝塚報告

史前學雜誌第五卷 第四號所載

史淵第五十五輯所載

菅生村は最近竹田市に編入された

(2) 鏡山猛 甕棺累考(二)―遠賀川式甕棺とその源流―

四、伸葬と屈葬の實例

甕棺内の屍體埋葬の姿勢は從來伸展葬と考えられていた。大かたの概説書をみても縄文時代の葬位が屈葬であり、彌生式の甕棺葬は伸展葬である事が述べられている。これは大形甕棺が一對の合せ口となつて棺を形成している場合、大人の屍體でも手足を伸ばして容れるに充分である所から推察された結果であらうと思うが、事實吾々が甕棺の中から人骨の發見出来る事がすくなく、又その葬位迄知る機會は容易に恵まれないのである。然し石器時代縄文式土器に伴う土葬人骨は、必ず屈葬と決つてゐる譯でなく、時と所によつて伸展葬が一部行はれてゐる事もある。それならば、彌生式甕棺内の屍體は伸展葬に限るものであらうか。この問題を解く爲には、直接甕棺内の人骨に就いてみるより外にない。甕棺内の人骨は大低腐朽してその跡も止めない状態であるから、北九州の甕棺の最も濃厚な分布を示す地域でも、甕内の體位を示す好例はそうざらにあるわけではない。幸に私は昨年度に二回甕棺内の入骨の原状を知り得る調査に行き當つたので、先づこれから紹介しよう。

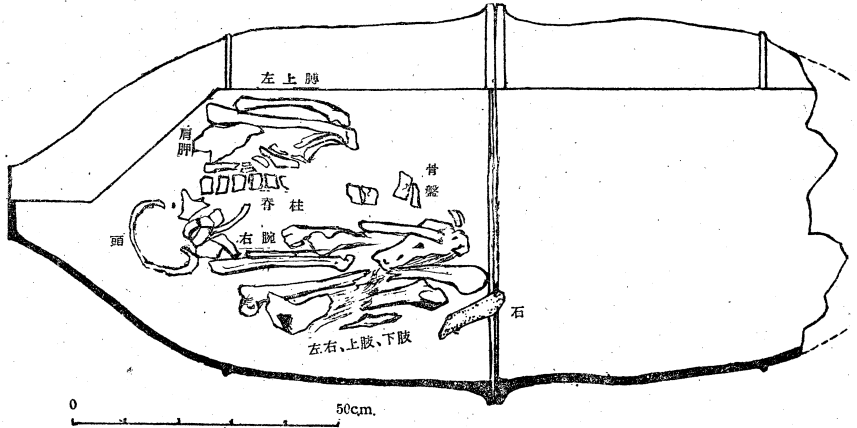
以下にあげる資料は、私自身の調査をA類とし知友諸先學の調査をB類とし、體位を直接示さないが、甕の大きさから屈葬と考えられるものをC類と分つことにする。

第一例は久留米南薰西町市營住宅敷地

昭和二十八年の初頭から、筑後川に望んだ南薰町の臺地の突端に、市營住宅が建設中であつた。この工事中に多數の甕

第 六 圖

甕 棺 累 考 (三)

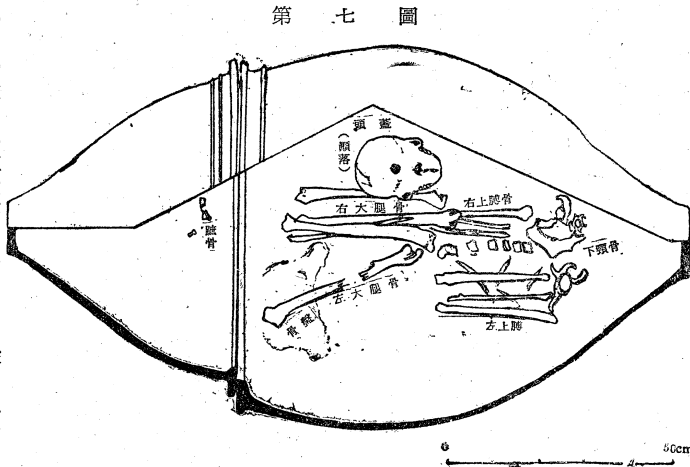


久留米市南黨甕棺人骨遺存状態

棺や石棺が掘り出されていた。工事に立ち會つた私と、福岡學藝大學久留米分校の波多野皖三助教は、學生の援助を受けて現場に保存出來ない甕棺を計測撮影して、久留米分校内の歴史研究所資料室に運搬し接合復原する事が出來た。この土地は西方ではかつて玉類を出した櫛原町の甕棺臺地に連續する地域でその間隔五百米であらう。甕棺の形式は、遠賀川式の傍系と思はれる器形をもち、筑後地方でも他に類例の少ないものが多かつたが、こゝで見出した人骨殘存の甕は須玖様式に近いものがあつた。口縁部は如意形とも、鋏先形ともつかぬもので下腹部に凸帯を一條めぐらしている、ほぼ同大の甕を二つ口を合せて水平に近く埋められていた。高さ九〇糎、口徑七七糎、兩甕の底の中心をとつて計ると、頭蓋骨のある方が僅か三度低くなつてゐる。従つて接合部は水平に近い。然しこの人骨は下甕（水平に近いから下甕と云うも實感は伴はないが）だけに遺存しているのである。若し双方にまたがつて伸展葬位であつたならば、當然兩方の甕に遺存する筈である。双方からすり落ちる心配はないのである。

さて問題の人骨に就いては、頭蓋骨もさしたる位置を變える事なく、椎骨、肩胛骨、上下膊骨、大腿骨、脛骨等大部分の骨が現位置に見出されたので、手をまげ膝を屈した狀況がよくわかる。私は丁度久留米大學醫

學部に來講中の九太金關丈夫教授に連絡をとり、久留米大學解剖學教室の方々と共に來援をうけて、人骨の調査を依頼した。何れその細部の結果は教授より發表があると思うが、當時この骨を残した主は老年の女性である事を教えられた。腰



肥前 中津隈 甕棺人骨遺存状態

推はやく曲り加減に兩手は體側につけ仰臥の姿勢である。兩足は右體側に曲げられていた。明かに屈身の姿勢である。兩甕合せて一米九〇糎の内容を持つので、伸葬に充分であるのに、屈葬が明かである。接合部の底の方に長さ二〇糎許りの棒状の自然石(砂岩)が横はつていた。その意味は明かでないが、後の混入とも思はれない。もと／＼この臺地でない石である。調査の日は二十八年二月二十八日であつた。

第二例は佐賀縣三養基郡北茂安村中津隈

昭和二十八年六月二十六日、筑後川の氾らん後その復舊工事が行はれ、筑後川北岸にのぞむ臺地の土採りがはじまつた。その作業中甕棺が出土し、その數も數十個に及んでいると思はれるが、連日の土採りに立會う暇なく、時々調査で終つたのは残念であつた。九月十日歛先にかゝつた甕棺から、完全な形をもつて残つている人骨を見出した。下がめは深さ一米口徑八〇糎上がめは深さ四九糎、口徑七七糎。合して一米五〇糎である。人骨は下がめに大部分残つていた。たゞ頭が下甕の下部にあつたのが、傾

斜二〇度の爲位置がずれて中央邊に顛落していた。然し背柱骨、肋骨、肩胛骨、上膊骨、尺骨、撓骨、骨盤、下肢骨等すべて原位位置のまゝはつきりみられた。先づ兩手はひぢの所から折り曲げられ、背柱の兩側に置かれていたので、仰臥の姿

勢である事が知られる。骨盤は兩がめの合せ目に近く兩足がひざを折つて體の右手に重なつてゐる。この姿勢は前記の第一例の姿勢に似てゐる。勿論成人骨である。この下甕に入れられてゐる屍體は明かに屈葬位であり、上甕には足指の趾骨の殘片があり、これ等の骨がすり落ちたものでない事を物語る。右の二例は私の直接調査し得た所であるが、知友の調査によつて實測圖や寫眞等の提供を受けたもので屈葬と思はれるものに次の三例がある。

(一)、福岡縣筑紫郡春日町小倉

昭和二十八年のはじめの頃、合口甕棺の中に成人骨が屈葬仰臥の姿勢で見出された。この地は、有名な須玖岡本の南約一軒許りの位置で中期甕棺と思はれる。大野中學校長龜井勇氏の調査結果を聞いたものである。

(二)、福岡縣浮羽郡山春村大野原

昭和二十五年十一月大野原の開墾地で發見された一甕棺内の人骨は、保存狀態良好で、よく仰臥屈葬の狀態がわかつた。中期甕棺の合せ口で、内徑一、四七米傾斜約十五度を計つたと云う。當時浮羽高校に居られた田中幸夫（現黒木高等學校校長）氏の示教による。尙この屈葬人骨を容れた狀態は岩波寫眞文庫「金印の出た土地」に寫眞が紹介され、甕は浮羽高等學校に保存されてゐる。

(三)、福岡縣飯塚市立岩

昭和八年中山平次郎先生の調査で、福岡縣史蹟名勝天然紀念物調査報告書第九輯にその詳報がみえる。「飯塚市立岩運動場の甕棺」報告によれば甕棺群のうち、深さ一、二米徑〇、五一米の合せ甕が殆んど水平の位置に發見された。その際齒と下顎骨が口邊接合部の位置にあつたといはれ、すり落ちたのでなく、原位置を保つたものと考えられている。但し遺骸の部分は既に少い殘片にすぎないから、屈葬位と推定するの他姿勢の詳細は判らない。

(四)、佐賀縣神埼郡東背振村三津

昭和二十八年度の佐賀縣文化財報告書第二輯に載せられた七田忠志氏の報文「東背振村三津の石蓋甕棺と内行花文明光鏡」に紹介された甕棺八基について、屈葬位にあるものを注意されている。(2)號と(4)號では頭蓋が甕の下底に轉落せず、甕の底近くに整然と膝を屈した仰臥屈葬の姿勢を認むる事が出来たとされている。殊に(2)號の石蓋單甕からは左前膊骨に貝釧十、首部の邊りに管玉と小玉を装つた成人骨をみたと言う。

(4)號は胴の中央から上を打欠ぎ取つた下半部の土器を蓋とする大形合口甕棺と云はれ、成人骨が出ている。猶漢式鏡を出した石蓋の單甕(8)號は深さ九七糎程度で而も發見された人骨は成人骨とゆうから、この深さでは到底伸展葬では入り相にないので、やはり屈葬と考えなければならぬ。

(五) 熊本市神水町

昭和三年下林繁夫氏の調査によつて、數個の甕棺(熊本縣立師範學校保存と云はれるが、現在の熊本大學教育學部となつて猶現存しているか調べていない)に人骨が屈葬の状態にあつたと云う。この甕棺は上甕が蓋として發達した單甕的なものと云はれている。これは京都帝國大學文學部考古學研究報告第十一冊「筑前須玖岡本史前遺跡の研究」に記された第五章の註記である。

これまであげた諸例は、佐賀縣三津の(8)號棺を除いては屈葬位の判明するものであつたが、吾々は更に直接遺骸の整つた姿を残さないまでも、骨の一部或は齒の一本でも残つて埋藏屍體の年令が推定出来れば、棺の大小によつて屈伸何れの場合が適當であるかを知る事が出来る。とゆうのは、成人遺骨を伸展出来ない程の小形棺が屢々ある事である。又伸展葬に適した大形合口甕といえども、その一方にだけしか屈葬屍體を容れていない事例は、先にあげた通りであるから、合口大形甕必ずしも伸展葬と限らない事に留意すべきであらう。吾々はこの第三C類の資料として左の五例をあげることが出来る

一、大分縣日田市(舊朝日村) 大字小迫字宮ノ原

昭和二十八年十月五日、彌生式遺跡に於て掘りかけの甕棺を調査して、少年の齒を採集する事が出来た。鉢形土器二つを挿し合せにしたもので内径は七四糎にすぎない。たとえ少年と云つても屈葬でない^(注二)と容れられない小棺である。この甕棺は石蓋土壇の一部を破つて埋められている事を附言する。本調査は別府女子大賀川光夫氏と共同して實施し佐賀縣の松尾禎作氏又同行された。

二、佐賀縣三養基郡旭村儀徳（元BS自轉車工場構内）

昭和二十四年一月佐賀縣教育廳と九州考古學會共同で調査した甕棺遺跡で、この概報は佐賀縣史蹟名勝天然紀念物調査報告書第八輯^(注三)に載せている。即ち一の石蓋甕棺内から四才前後の人骨が採集された。その甕の深さは六六糎（二尺二寸）で屈葬と推定される。

三、福岡縣三井郡太刀洗村山隈

昭和十三年私の通りがりの調査で、中期の合せ口内径一米九糎の斜位埋葬の甕棺が半ば壞されているのをみて現狀實測をしておいた。未だ甕の中にも骨が残つて、外部にも一部は取出されていた。これも成人骨であつたので屈葬と推定していた。

四、佐賀縣三養基郡中原村上地

佐賀縣史蹟名勝天然紀念物調査報告第十輯^(注四)に松尾禎作氏の報告がある。上記の甕棺墓地に於ける第五號甕棺は挿入された合口甕棺で、内径一米二〇糎内部の人骨は一米三〇——四〇糎程度のもので完全な伸展葬は出来ぬ。

五、福岡縣朝倉郡福田村大字平塚字栗山

筑後川の支流本郷川と佐田川の間にある冲積臺地の一部分を占めるこの遺跡は、古くから甕棺墓地として注目されていたが、先學の手によつて數回の調査を經ている。今記録される所でも、大正六年中山平次郎博士の踏査で彌生式遺跡である

事が確かめられる。

大正十二年には中山先生と梅原末治氏の發掘があり、大正十四年には地均工事中合口甕棺三、單甕二、發見、うち石蓋を持つものから、貝釧二十二個を裝つていた人骨が出さる。

又大正十四年二月附近の一地點から甕棺内より鐵戈一振が發見されている。

このうち大正十四年貝釧を發見した甕棺は石蓋の單甕で、高さ九六糎口徑六〇糎胴部最大内徑七八糎の大きさであるから、成人であれば伸展では入らない。中山博士によれば甕棺内の少量の骨片中成長した三稜骨があり、成人の屍體と推定されるので、屈葬に相違ないとされている。その詳細については、左記の論文を参照。

中山平次郎氏「筑前國朝倉郡福田村平塚字栗山新發見の甕棺内遺物」考古學雜誌第十五卷第四號
以上C類の資料は五例を記述したが、三津遺跡の一例を加うれば六例である。

B類即ち人骨遺存の屈葬位の判明するもののうち、知友の示教並びに先學の報告によるもの五例
A類は私自身の調査によるもの二例を加え、計十三例が屈葬位の判明するもの、及び屈葬位と推定せられるものである。

次に屈葬でない伸展葬の明かな遺體を残していた資料を搜すと、二例をこゝに引用する事が出来る。

一、福岡縣朝倉郡福田村平塚字栗山

大正十二年中山平次郎、梅原末治兩氏の調査によれば、遺跡は前記屈葬例にあげた所に近い平塚字栗山の第二號甕棺に於て、上甕に頭骨、下甕に脚部の骨が残つていたと云はれる。

字栗山の永露氏の屋敷の西南方で、約三十度の傾斜を持つた大形合口甕棺で、兩甕の内徑合せて一米六七糎、伸展葬の例として左記論文に詳論されている。

梅原末治氏「筑前朝倉郡平塚の甕棺」藝文第十四年第八號所載

二、福岡縣浮羽郡船越村秋成

昭和十三年十二月の調査で、筑後川南の畑地で甕棺群集墓のうち、一基に合口、中期須玖様式の甕棺で、ほど同形の口縁を接する形式のもの内徑一米七〇糎あり、ほど水平であるが、嚴密には三度下つた下甕の方に足の骨上甕の方に頭蓋骨が認められた。水平位に近いので伸展葬にした原狀がよく觀察出來た成人骨であつた。人骨の保存狀態は極めて良好とゆう譯にはいかない。即ち頭蓋骨と四脚骨の大きな部分だけが残つて、小さい骨片は腐朽して跡を止めなかつた。

註(1) 水野清一氏島田貞彦氏「北九州に於ける甕棺調査報告」

人類學雜誌第四十三卷第十號所載

(2) 彌生式甕棺墓地遺跡で土器散布地に立石がある

(3) 松尾禎作、七田忠志氏「BS旭自轉車工場内遺跡」佐賀

(4) 松尾禎作氏「中原村上地の甕棺遺跡」佐賀縣史蹟名勝天

然紀念物調査報告書第十輯

縣史蹟名勝天然紀念物調査報告書第八輯

五、總括と考説

前項に列べあげた埋葬死體の姿勢を概觀するにあつて、便宜のため表記して見よう

番號	遺跡名	甕棺の形式	体姿	年令性別	調査年月日	調査者
1	筑後南葦西町	合口	仰臥屈葬	老女性	昭和二八、二、一八	鏡山院三猛
2	肥前中津隈	合口	仰臥屈葬	成人	昭和二八、九、一〇	波多野猛
3	筑前小倉	合口	仰臥屈葬	成人	昭和二八、一	鏡山勇
4	筑後大野原	合口	仰臥屈葬	成人	昭和二五、一一	亀井幸夫
5	筑前立岩	合口	屈葬	成人	昭和八	中山平次郎
6	肥前三津4號	石蓋單甕合口(挿入)	屈葬	成人	昭和二七、二八	七田忠志

7	肥後神水	合口	屈	葬	昭和三年	下林繁夫
8	豊後小迫	合口(挿入)	屈	葬	昭和二年、一〇、五	鏡山光夫
9	肥前饒德	石蓋單甕	屈	葬	昭和二年、一	賀川古學會
10	筑後山隈	合口	屈	葬	昭和三年	佐賀縣
11	肥前上地	合口	屈	葬	昭和二年五	鏡山猛
12	筑前平塚	石蓋單甕	屈	葬	大正一四	松尾禎作
13	肥前三津8號	石蓋單甕	屈	葬	昭和二七—二八	中山平次郎
14	筑前平塚	合口	伸	葬	大正一二、六	七田忠志
15	筑後秋成	合口	伸	葬	昭和一三	中山平次郎
				成		梅原末治
				人		鏡山猛

以上實例に就いて、甕棺内の屍體の姿勢を観察しつゞけてきたが、甕棺内に遺存する骨は上にあげたものゝ他、數例實見することが出來た。たゞ多くの甕棺は、三四十度傾斜して土中に埋められているので、骨はたとえ遺存していても、下底にすり落ちる傾向を持つてゐる。従つてこれ等の原位置のずれた骨格は屈伸の何れか判定に正確を期し得ない。これ等の場合は資料から除いて、こゝにはあげなかつた。又屈葬といつても、手足を完全に屈折した状態のものが多く見られるけれども、C類即ち甕に伸葬では容れることが出來ない大きさのものでは、足をやゝ曲ぐる程度でも容れられるものがあることは勿論である。屈葬とゆう體姿の中には、完全屈折の他に、こゝうゆうゆるやかな屈脚まであり、稀には縄文文化期の埋葬姿勢にも見られる。こゝでは縄文のそれに對比するのを目的としたために、屈葬の意味をゆるやかにとつた。前表についてまづ屈葬人骨の分布を見ると左の通りである。

福岡縣

五遺跡

五例(内筑前三例筑後二例)

佐賀縣

四遺跡

六例

大分縣 一遺跡 一例

熊本縣 一遺跡 數例

甕棺の分布の最も多い筑前筑後肥前を中心として屈葬人骨も亦例が多い。福岡縣の國分は筑前、筑後としたが、遠賀川流域一福岡平野一筑後川流域三となる。これに糸島唐津の平野を加えると、北九州の主要分布地域の大部分となるが未だ人骨發見の資料に恵まれない。この點將來福岡平野と共に注意を要する地域である。

九州の北海岸地域を除けば、一應彌生式土器の文化中樞圈内甕棺葬の最も盛行した地域に亘つて屈葬人骨の多いことは、この風習が地域的な特殊現象でないことを物語つてゐる。

次に甕棺の様式に就いては、前項の諸例は中期彌生式土器である須玖期のものが大多數である。たゞ久留米市南薰西町の甕棺は、遠賀川様式を幾分加味している程度である。肥前三津の八號甕棺は七田忠志氏の實測圖並に説明によると、く字形口縁を呈し後期（高三瀨期）にくだされるようである。大分縣の日田市小迫の甕棺も北九州の甕棺とはやゝ趣を異にし、後期の所産と思はれる。甕棺の盛行期として彌生式中後期があらわれるが、屈葬人骨も例數に乏しいうらみはあるが、屈伸の時代的變化を見ることが出来ない。吾々はこの時代的な變化をもつと各時代の實例について詳しく検討出来る日の來ることをねがつて止まないが、現在では右の程度を出でない。ことに古期遠賀川式甕棺の葬位資料を得たいと思つてゐる。將來資料の急激な増加は望み難いかも知れないが、縄文期と彌生中期の間をむすぶ意味で、一應の推察を下すことは許されるであらう。遠賀川式の甕棺は、未だ小形甕が多く、ほとんど伸展葬にしては成人體を容れることは出来ない、少年者でも屈葬にしないと容れられぬ程度の小棺にしばしば相遇するので、彌生式初期の葬位のみ伸葬多しとは考え難い。

考えてこゝに到ると彌生式甕棺の屈葬は縄文文化期の埋葬例と大差ないこととなる。勿論それは絶対に屈葬ばかりで、

伸展葬がなかつたという意味ではない。時に伸葬ありといった例は上述の通りである。はるかに萬を超すと考えられる彌生式甕棺の總數について、十數例の資料では確率から云つて絶對的な結論に導くのに不安を伴うけれども、現在の所伸展葬をなし得る充分な大きさを持つ合せ甕に屈葬屍體が容れられ、その一方の甕がほとんど空になつてゐる事實は何を物語るであらうか。甕棺の大きさが伸展葬の目的のため長大同形の合口の形式をとるといふ論據に支援を與えるものでは決つてない。

縄文文化期の貝塚發見人骨が屈葬が多いといつても、そこには伸葬も混つてゐる。清野謙次博士の調査によれば十二の縄文式貝塚に於て姿態のわかる三八九體の埋葬例を観察して八四例の伸展位を識別されてゐる。^(註一)これと同じことは甕棺に就いても云はれることで、反つて甕棺の方が屈葬位の方が高率を示す状態である。但しこの比率は何れの側にあつても絶對的なものでなく、たゞ屈葬位が支配的だといふ事で満足しなければならない現状である。

猶甕棺葬の體位姿問題に關連して、當時の他の墳墓樣式に於ては如何ゆう状態であるかも比較對照さるべきであらう。他の墳墓樣式と云えば、石蓋土壙と箱式棺位のものである。石蓋土壙や箱式棺の形そのものは長方形で、伸展葬に適した容積を示している。この二つの墓式は、相互に密接な近縁關係にあることを舊稿に述べて置いた。最近では、支石墓下の墓壙が多數發見され、これ等が圓形に近いプランを持ち、舟底形の中凹の底面を持つてゐることは又屈葬位の姿態らしくも思はれる。彌生式時代に於ける伸屈兩様の墳墓樣式が兩立するとすれば、殊に屈葬の意味も重要に解されるであらう。

註(一) 清野謙次氏著 古代人骨の研究に基づく日本人種論

Some Notes on the Burial Urns (Part Ⅲ)

— Re-examination about the Origins of the Burial Urns —

By T. Kagamiyama.

In my article: "Some Notes on the Burial Urns—the Burial Urns of Ongagawa Style and their Origin, Part Ⅱ" the Shien 史淵 No. LV, I examined the origins of the burial urns in northern Kyushu: The Part Ⅲ is the supplement to this article.

1. Four examples of double funeral urns, namely the joints of jars at the rims of the mouths, were discovered. Each of them consists of an Ongagawa-type jar of early Yayoi-type and on Yūsu-type jar having some elements of Jōmon pottery.
2. It has been said that the posture of corpse kept in the burial urns of Yayoi-type is an extended position. But in the examples newly discovered, crouched positions are more numerous than extended positions. Crouched position is said to be burial method in the epoch of Jōmon culture. Of burial urns, too, we find many such examples.

From the above 2 items it became clear that there are close relations between Jōmon burial urns and Yayoi burial urns.